

## 格助詞「に、で」の習得における意味役割の発達の分化

Developmental Specialization of Semantics of Particles *ni* and *de* in Japanese

伊藤 美千子・佐藤 滋

Michiko Ito and Shigeru Sato

東北大学大学院国際文化研究科

Tohoku University, 980-77 Japan

E-mail: {michiko, satos}@intcul.tohoku.ac.jp

**要旨:** 格助詞「に」と「で」は、多様な意味役割を持つが、本報告ではこれらの格助詞の意味の多様性の習得を発達の観点から考察する。小学生の作文に現われる格助詞「に、で」の使用状況を、意味機能別に分析し、その使用法の発達の拡大と分化を検討した。その結果、これらの格助詞の意味の習得が時空的な場所の意味特徴を中心とするプロトタイプからその抽象的な類推による用法へと、学年進行的に分化していくことが示された。

### 1. はじめに

幼児が助詞を習得していく過程では、喃語期、一語文期といった前段階を経て、「ジュース ホシイ」というような助詞が脱落した二語文期の後、次第に助詞の使用が始まる。そして、就学前にはだいたいの助詞の使用が可能になる。だが、表現意図に即した正確な使用のためには動詞とのつながりやそれぞれの助詞のもつ複数の意味役割を把握していなければならず、また助詞の多様な意味の習得のためには、その前提となる認識の発達が伴わなければならない。そのため、自発的に助詞を使用できるようになるのは比較的早い時期であってもそれぞれの助詞に含まれる多様な意味の習得が完了するのは、かなり後である。実際に、言語発達が書き言葉へと広がっていく就学後の児童の作文等を見ても、助詞の誤用がよく見られ、小学生段階では助詞習得がまだ完成されていないことがうかがえる。助詞のもつ多様な意味役割を考えると、その習得では、はじめは大まかに捉えている段階から次第に意味役割の細分化が進んでいき、より広い意味範囲へと使用が広がっていくことが推測される。

一般に自然言語においては、述語と名詞の作る格関係に関して統語的な制約の強いものから意味的に決定されるものへの段階的な変移があり、これらを中心格と周辺格というように二分することが行われている(Blake 1994)。多くの言語では文中で主語および目的

語となる名詞の格標識は無標である場合が多く、これらの担う格関係を中心格と呼ぶ。これに対して副詞的な役割を果たすその他の要素を周辺格と呼ぶ。日本語の場合、「が」と「を」が中心格を表す格標識であり、「で」が周辺格、「に」が中心格と周辺格の両方を担うと考えらる。多岐にわたる「に」の用法の広がりはこの助詞が持つ機能を表していると考えられる。

本稿では「に」と「で」の用法頻度の発達の变化から格助詞の意味役割の習得ということに着目し、小学生の段階を助詞の多様な意味役割が発達的に分化していく段階であると捉え、格助詞「に、で」の意味用法の発達の拡大と分化について検討していく。

### 2. 就学後の助詞使用の特徴

従来の助詞の発達研究は、言語能力の発達が著しい就学前に焦点を当てているものが多く、これらは、助詞の初出年齢や使用数の分析、また特定の助詞の理解に関する発達心理学的実験から、就学前あるいはその直後までには助詞が習得されると示している(永野 1959; 大久保 1967; 藤友 1987)。

これに対して、伊藤ら(1991, 1993)は、「文の産出と理解についての競合モデル」(Bates and MacWhinney 1987; MacWhinney and Bates 1989)に則った実験心理学的アプローチから、助詞「は、が、を」について、その獲得の困難性を示している。伊藤

ら(1991, 1993)は、文の理解において、その格関係の把握には、助詞のみを手がかりにしているのではなく、語順や語の意味的要素に依存している面が大きいことを取り上げ、助詞以外の手がかりがない状況、つまり文の理解で手がかりとして語順や語の意味を取り除いた場合を設定し、助詞のもつ意味機能だけで文を理解できるようになる時期を検討した。その結果、語順や語の意味的要素の影響を受けずに、助詞のみの手がかりで文を正しく理解できるようになるのは、10～12歳頃であり、これらの助詞の習得の完成が、かなり遅いことを明らかにした。このことから、これらの助詞は、かなり早い時期から使い始められるものの、その意味を完全に習得できるようになるまでには、かなり長い期間を要するといえる。

また、国立国語研究所(1966)は、7年間にわたる小学生の言語能力の発達についての調査研究から、小学生の「格助詞の使用能力の発達」に関する特徴の一つとして、中学年頃に誤用が目立つ点を挙げている。誤用の特徴としては、格助詞「が」と係助詞「は」の混用、格助詞「を」と「に」の混用が多く、この段階が引き続き助詞の習得過程にあることがうかがえる。

### 3. 数量的分析

**資料：**宮城県、茨城県、東京都の公立小学校の小学生2年生から6年生まで各学年24名ずつ、計120名が4種類ずつ書いた文章全480作品を対象にした。4種類の文を書くにあたっては、手続きとして次の二つの形式をとった。

手続き1：「三学期のめあて」という題を提示し、題についての説明後、作文用紙に書くことを求め、それらを分析の資料とした。実施時期は、1995年1月中旬である。

手続き2：一つの物語からなる4コマの絵を3種類用意し、実施要領についての説明後、それぞれに対して一連の絵に即した文章を書くことを求め、それらを分析の資料とした。3種類の絵は、Fleming (1961)から抜粋したものである。題名をそれぞれ、「カラスとキツネ」、「犬」、「牛とカエル」と呼ぶことにする。これらの一連の絵を文章化するにあたって、課題の意図や絵の内容等が児童に難しいような場合には、各学年の実態に応じてわかりやすい形で説明した後、実施した。実施時期は、1995年9月上旬である。

いずれの場合にも、「後でその作文を読む人によく

表1 格助詞「に」「で」用法の分類基準

「に」	
A:	a. 存在の場所, b. 動作・作用の時, c. 相手, d. 変化の結果, e. 到達点・到着点
B:	f. 動作の目的, g. 動作の対象, h. 動作の原因・理由, i. 状態の対象, x. その他
「で」	
A:	a. 動作・状態の場所, b. 状態
B:	c. 数量の限定, d. 原因・理由, e. 動作主, f. 手段, g. 材料, x. その他

伝わるように書くこと」を指示した。作文の長さについては、学年ごとの発達に応じた実態を捉えるために特に制限を設けなかった。また、所要時間に関しては、各児童の個人差を考慮し、特に厳密な制限は与えなかったが、各30～40分を目安とした。

**方法：**得られた資料から、格助詞「に、で」を使用している文章を抽出し、次のように用法ごとの分類基準(田中 1990)に若干変更を加えたものにしたがって分類後、格助詞「に」、「で」の用法別の使用頻度を求め、発達的な用法の広がりを数量的に分析した。この分類基準を表1に示す。

**分析：**格助詞「に、で」の各用法別の使用に関する分析を次の2点において行った。

1. 使用頻度の高い用法が、小学生段階で定着している助詞の基本的用法なのではないだろうか。各題材(4種類：「三学期のめあて」、「カラスとキツネ」、「犬」、「牛とカエル」)での用法を総計したものの使用頻度から、実際の助詞使用の状況を捉える。

2. 格助詞「に」と「で」は多様な機能を持つが、学年を追うごとに、時空間的な場所の意味特徴を中心とするプロトタイプからその抽象的な類推による用法へと類推を働かせ、より多くの機能を駆使するようになるのではないだろうか(山梨 1995)。この意味での「に」と「で」の発達的な使用の広がりを捉える。

### 4. 結果と考察

**使用頻度：**4つの題材に現われるすべての格助詞「に、で」を用法別に分類し、各使用頻度を総計として出した使用状況の推移を図1～2に示す。図1のa～iとx、図2のa～gとxは、表1のそれぞれの用法に対応する。これらの図から、使用が最も多いのは、格助詞「に」では「存在の場所」(2年)、「動作・作用の時」(3～6年)、格助詞「で」では「動作・状態の場

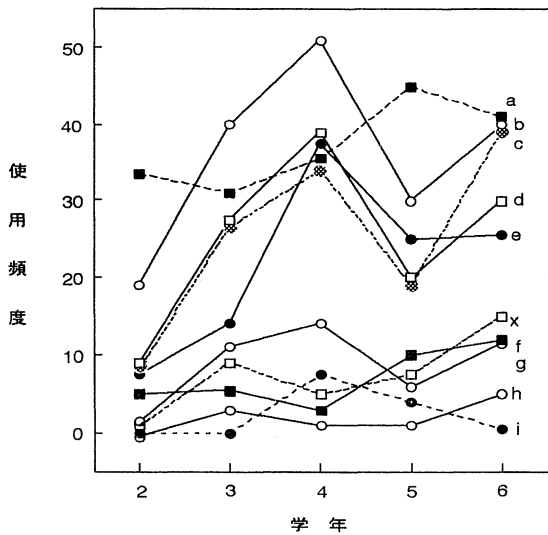


図1. 格助詞「に」の使用頻度

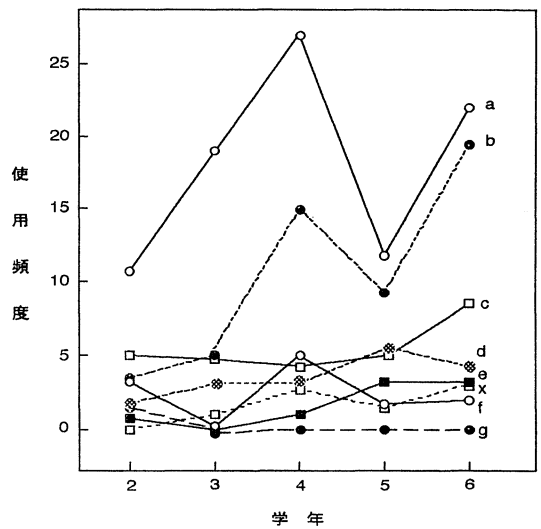


図2. 格助詞「で」の使用頻度

所」の用法であった。2年生の段階で使用が多く見られた用法は格助詞「に」では「存在の場所」、格助詞「で」では「動作・状態の場所」であったが、助詞の意味役割の習得を語の意味の発達という側面から捉えると、はじめは基本的あるいは代表的な意味が習得され、段階的にいくつかの意味特徴が付加されることによって、より広い意味範囲へと分化していくと考えることができる。初期の段階に習得される用法が格助詞の基本的な意味機能を構成していくと推測される。したがって、低学年の段階で使用が多く見られた用法、すなわち、時空の場所的な意味特徴を格助詞「に、で」のプロトタイプと考えておく。

**用法の広がり**：用法の広がりを発達的に考察するにあたって、いずれの題材においても、ほとんどの用法で5年生での使用頻度が低くなっていることに注目せざるを得ない。筆者のひとり伊藤の教職経験から、各作文の質や、一人当たりの平均文数や総文節数の低さからも、これは発達的な特徴の現われというよりは、作文能力に関する学級の特質に関係していると考えられる。したがって比較する上で、この特殊性を考慮する必要があると判断し、5年生の統計を除外した。

それぞれの用法の発達の推移を検討するにあたっては、分析の結果から、使用頻度の高い用法と低い用法に分けてその傾向を捉えた。これら二つをそれぞれ「A：高使用頻度群」、「B：低使用頻度群」とし、以下、A群およびB群と呼ぶことにする。表1のA、Bは「に、で」それぞれの各群に含まれる用法を示してい

る。

頻度群別の分析の結果をそれぞれ図3～4に示す。B群において、格助詞「で」の3年生での若干の低下が見られるものの、学年が進むにつれて使用が伸びている。B群に含まれる用法は、使用が比較的困難な用法である。よって、B群での中学年以降の伸びは、学年進行に伴い、より複雑な用法が使用可能になってきていることを示唆している。これに対し、A群での伸びは、4年生を頂点として停滞もしくは下降している。この結果から、4年生前後から、それまでに習得したプロトタイプからの意味の拡大が始まると考えることができるのではないだろうか。また、この二つの

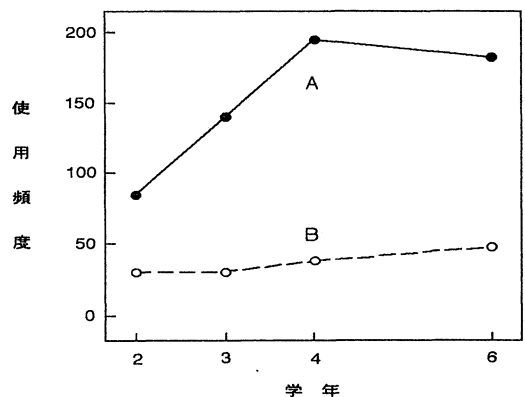


図3. 格助詞「に」の使用頻度  
[A. 高使用頻度群] 対 [B. 低使用頻度群]

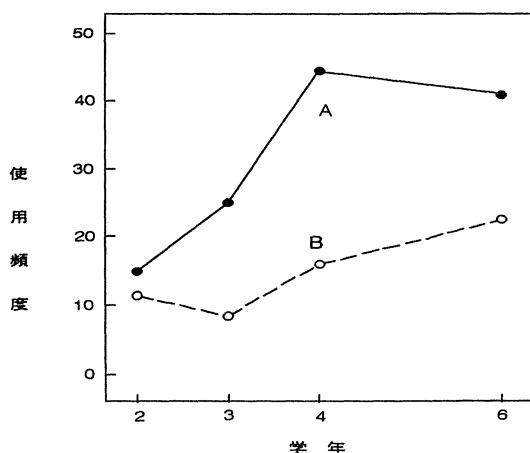


図4. 格助詞「で」の使用頻度  
[A. 高使用頻度群] 対 [B. 低使用頻度群]

傾向の違いから次の2点が確認された。(1) 低学年では、時空間的な場所の概念を中心としたプロトタイプの意味特徴を基盤としたA群での使用の割合が大きいが、高度の類推を必要とするB群の用法の使用が少ない。一方、(2) 高学年に進むに従い、B群での使用が増し、A群での使用が減少傾向にある。この二つの相互の関係を助詞の意味習得における発達の分化といった観点から考えても、発達が進むに従い、多様な意味機能の習得へと広がっていくことを示唆している。

## 5. おわりに

格助詞「に、で」の使用頻度についての小学生作文の発達の観察から、助詞の意味の習得においては上述のような基本的な機能がまず使用可能となり、さらに中学年に入って抽象的な類推による用法へとカバーする意味範囲が拡大していく傾向が確認された。これらの結果は、対象とした作文上に現われた格助詞の使用状況から捉えたものであり、助詞の意味用法の広がりには焦点を当てたものである。表1に示したような助詞の用法のそれぞれの習得過程を議論するには、方法論的にさらに綿密な枠組みを設定する必要がある。

小学生の作文の特徴として、学年進行に伴う表現能力の発達によってより多様な表現方法を身につけ、表現の仕方に幅が出てくる傾向が見られる。そこには認知能力一般の発達に伴って格助詞の意味の習得がプロトタイプからその抽象的な類推による用法へと、分化していく過程の反映があると考えられる。一方、中学

年でこのような言語能力の発達、その使用の未熟さの現われとして今回のデータでも興味深い誤用が見られているが、誤用の分析については今後の課題としたい。

**謝辞：**作文資料の収集にご協力いただいた宮城県黒川郡富谷町立東向陽台小学校の神淳子教諭、宮城県刈田郡蔵王町立平沢小学校の鈴鹿裕子教諭、茨城県筑波郡伊奈町立小張小学校の会沢裕之教諭、田上寿教諭、東京都墨田区立菊川小学校の佐々木陽子教諭ならびに作文を書いていただいた児童の皆さんに厚く感謝したい。本研究は一部に文部省科学研究費No. 07610511 およびNo.07221201の援助を受けている。

## 参考文献

- Bates, E. & MacWhinney, B. (1987). Competition, variation, and language learning. In B. MacWhinney (Ed.), *Mechanisms of language acquisition*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Blake, B.J. (1994). *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fleming, G. (1961). *Guided composition for students of English*. Buckhurst Hill, Essex: Chigwell Press.
- 藤友雄暉(1979). 「幼児の助詞の習得に関する発達の研究」 *教育心理学研究*, 27, 11-17.
- 伊藤武彦・田原俊司・朴媛淑(1991). 「被動作主をあらわす助詞ヲの獲得 - 助詞ガとの手がかりの強さの比較 - 」 *教育心理学研究*, 39, 75-84.
- 伊藤武彦・田原俊司・朴媛淑(1993). 『文の理解にはたす助詞の働き - 日本語と韓国語を中心に - 』 風間書房.
- 国立国語研究所(1966). 『小学生の言語能力の発達』 明治図書.
- MacWhinney, B. & Bates, E. (Eds.) (1989). *The Crosslinguistics Study of Sentence Processing*. New York: Cambridge University Press.
- 永野賢(1959). 「幼児の言語発達について - 主として助詞の習得過程を中心に - 」 *国立国語研究所論集1 ことばの研究*, 383-396.
- 大久保愛(1967). 『幼児言語の発達』 東京堂出版.
- 田中稔子(1990). 『田中稔子の日本語の文法 - 教師の疑問に答えます - 』 近代文芸社.
- 山梨正明(1995). 『認知文法論』 ひつじ書房.